

## 2022 年度春夏学期 歴史学のフロンティア(歴史学方法論講義)

### 12. グローバルヒストリーの視座から見る「海の日本帝国主義」(7月7日)

Nadin Heé (人文学研究科・人文学専攻)

#### 1. グローバルヒストリーの視座から見る海の帝国史

- 先行研究：海は国家の枠組みを超え、帝国内・または間帝国で 交易・交流・コミュニケーションを可能にするものとして 対象
- 海のそれぞれをひとつの地域圏として捉え、なかでも太平洋海域とインド洋海域に注目 (海域史<->海洋史)

#### 2. 日本の海洋帝国の形成

- 1930年の時点で日本は世界で一番の漁業国となっており、ウィリアム・ツツイの言葉を借りれば、「ペラジック・エンパイア」つまり「深海帝国」になる
- 事例：マグロ・カツオ漁業
  - > 1930年代より漁業により生産された資本が上昇
  - > マグロの経済価値は、ブルデューがいうところの「文化資本」の力によって強化
  - > マグロは、象徴資本による価値創造のプロセス

#### 3. 領有権の容量的側面と間帝國的空間としての海

- 帝国の遺産-> 海を空間、時間的に間帝國的に捉える
- 間帝國的空間としての海：協力・競争・ネットワーク  
領有権の容量的側面 (Volumetric Sovereignty)
  - > 海洋資源の分割
  - > 海洋に関する知識生産
  - > 帝國的ブローカー、仲買人 (労働移民・回遊類)

#### 4. 帝国時代の遺産と海洋の領土化をどう考えるか？

- 海洋の領土化: 特に国際関係、政治、法制史の分野では、第二次世界大戦直後の近代的でグローバルな海洋開発プロセスとして捉える
- 最大持続可能漁獲量 (Maximum Sustainable Yield, MSY) : 持続可能な資源開発という視点の事例  
<->
- 「コモンズ悲劇」Garrett Hardin の Tragedy of the Commons” という論文 (1968) に基づく経済学的法則：多数者が利用できる共有資源が乱獲されることによって枯渇してしまう
- それに関する反論：Arvid Pardo や Elisabeth Mann Borghese ->海を人類共通遺産に  
->国際連合海洋法条約の形成

- 国際連合海洋法条約に関する議論：法的には17世紀の Hugo Grotius: *mare liberum* 『海洋自由論』と John Selden: *mare clausum* 『閉鎖海論』に遡る->海は国家領土の一部となる
- 法的概念と漁業紛争の絡み合い：ニシンやマグロ類の回遊性など、生態学的な要因の役割
- 日本マグロ・カツオ漁業事例：漁業時間的に：海洋資源開発の戦前と戦後の連続性：環境知識・技術・人間・企業（帝國的な枠組みで形成->知識・技術移転・援助：冷戦・近代化論・開発主義が背景）

#### 5. 結論：海洋の領有化とグローバル・コモンズとしての海洋資源

- Charles Maier の解釈：20世紀の領有化は帝国～国民国家～国境を越える地域世界、グローバルリズムへの線形的なプロセス  
<->
- 海や海洋開発の視座から時代区分を読み直す：20世紀の地理学的、法学的、ジオポリティカル的なマッピングによる世界秩序の形成に関しては海の領有化を見逃せない
- 線形的なプロセスではなく、そして、むしろ、帝國的、国民国家的な側面の共存、同時性
- 海の国際法的な領有化の視点から見ると1970年代から国家と国境が強化していく
- 海洋開発の間帝國的な知識生産や冷戦の開発主義の側面を歴史的に把握することは現代の海洋開発のメカニズムを理解しようとする際、役に立つ
- 現在の海：世界最後の果たしていないフロンティアの1つ  
->国際的な政治的課題：海洋資源の管理や持続可能な開発目標

#### 参考文献

David Armitage, Alison Bashford, and Sujit Sivasundaram, (eds.) *Oceanic Histories*. Cambridge UK, New York: 2018.

Daniel Hedinger and Nadin Heé, “Transimperial History: Connectivity, Cooperation and Competition,” *J. Mod. Eur. Hist. Journal of Modern European History* 16, no. 4 (2018).

Charles S. Maier, “Consigning the Twentieth Century to History: Alternative Narratives for the Modern Era,” *The American Historical Review* 105, no. 3 (2000).